

# 記紀の道を基軸とした地域デザイン

小笠原浩幸<sup>1</sup>・崎谷浩一郎<sup>2</sup>・西山健一<sup>3</sup>

<sup>1</sup>非会員 株式会社E A U (〒113-0033 東京都文京区本郷2-35-10 本郷瀬川ビル1F,  
E-mail:ogasawara@eau-a.co.jp)

<sup>2</sup>正会員 株式会社E A U (〒113-0033 東京都文京区本郷2-35-10 本郷瀬川ビル1F,  
E-mail:saki@eau-a.co.jp)

<sup>3</sup>非会員 株式会社E A U (〒113-0033 東京都文京区本郷2-35-10 本郷瀬川ビル1F,  
E-mail:ken@eau-a.co.jp)

記紀の道は、日向神話が息づくまち、宮崎県西都市の田園風景の中に整備中の散策路であり、地域に点在する神話の伝承地をめぐる道である。計画策定から十数年前の歳月をかけて少しずつ整備が進められ、現在も整備が続いている。本計画の特徴の一つとして、行政、設計者、住民が対話を重ねながら、時間をかけて記紀の道らしい道づくりを実践していることが挙げられる。本稿は、住民と道の関わり方に焦点を当て、事業実施体制や道路デザインの要点を振り返りながら、記紀の道が地域への愛着や誇りの醸成に寄与している実態を報告するものである。

**キーワード:** 歩行者専用道路, 散策路, 遊歩道, 史跡, 古墳, 道づくり, 地域づくり, 住民参加

## 1. はじめに

### (1) 事業の概要

記紀の道は、宮崎県西都市の田園風景の中に点在する日向神話の伝承地をつなぐ全長約4kmの散策路であり、そのうち約1.2kmが歩行者専用道路として整備が進められている。歩行者専用道の整備は、西都市が行う都市再生整備計画事業の基幹事業のひとつであり、平成18年度から始まった事業は令和元年度で14年目となる。事業主体は西都市であり、筆者らは道路の基本デザインや詳細設計監理、工事監理、関連する委員会運営、まちづくり活動支援等を、西都市から業務委託を受けて行っている。「何をつくるか」はもとより「どのようにつくるか」「誰とつくるか」など、新しくつくられる道が地域にとってどういう存在であるべきかという点から向き合い、道を基軸にした地域デザインに取り組むものである。

### (2) 計画の背景

西都市は宮崎県のほぼ中央に位置し、市内を流れる一ツ瀬川が形成する河岸段丘の下段に市街地が形成される。段丘上には三百基余りの古墳が点在する特別史跡「西都原古墳群」が広がる。段丘の中段域には、民家や田畑に混じって古墳が点在する独特の風景が広がり、日向総社の都萬神社や日向国府跡等の史跡、日本最古の歴史書『古事記』『日本書紀』（以後、記紀）に記される日向神話の舞台とされる伝承地が点在するなど、歴史的資産

が多く残る。一方、豊かな湧水、点在する樹齢数百年の巨木、田畑の奥に広がる山並みなど、悠久さを感じさせるおおらかな風景もこの地域の特徴である。戦後の区画整理事業で田畑は住宅に変わり、水質は悪化し、田園風景は失われつつあった。地域への関心が低下した結果、神話の伝承地は埋もれ、西都の歴史的資産としての継承が危ぶまれていた。古代史跡と神話の伝承が息づく風景を取り戻し、西都原古墳群との相乗効果によって地域の価値を再構築するデザインが求められていた。

### (3) 計画の目標

本計画では、1本の散策路の整備をきっかけにして、住民や来訪者の交流が生まれ、自分たちが暮らす地域への愛着や誇りが醸成されることを目指している。史跡や伝承地のみならず、一帯に広がるおおらかな風景も含めて地域の価値と捉え、住民が風景を通じてその価値を再認識して次世代につなげていくことが、計画の大きな目標であるといつて良い。

## 2. 体制

本計画では、十数年にわたる整備期間の中で何度か組織を改編し、事業段階に応じて適切な議論ができるように体制を逐次整えた。当初、記紀の道の整備計画を作成するにあたり、関係者の合意形成の場として「西都市歴

史を生かしたまちづくり計画策定委員会」が2005年度に組織された。一方、市民ワークショップの形式で「記紀の道歩こう会」が2007年度に開催された。以来、委員会およびワークショップは、それぞれの事業段階に応じて柔軟に改編され、現在に至る。

その中でも特に効果が大きかったのは「もののデザインの議論をする場」と「使い方の議論をする場」を分けたことである(図-1)。それぞれ「委員ワーキング」「コアメンバー会議+分科会」として組織し、西都市はその両方を主催し、筆者は総合的なコーディネーターとして携わっている。それぞれの場で濃密な議論を行い、成果をハード・ソフトの相互にフィードバックできる体制となっている。この体制は、本稿の主旨たる第4章の取組みが展開されていくにあたって必要不可欠であった。

また、本業務とは別の組織ではあるが、「妻北地域づくり協議会」が2012年度に設立された。設立以来、妻北地域における様々な取組の一つとして、記紀の道沿道の花植えや清掃を中心に、記紀の道を歩こう会の開催などを行っている。コアメンバー会議には、地域づくり協議会のメンバーも参画している。

なお、筆者らは当初は土木のデザイン部隊としてコンサルタントの協力会社として参画していたが、2015年からは西都市から直接業務委託を受け、地域との関係性をより深めながら業務に携わっている。

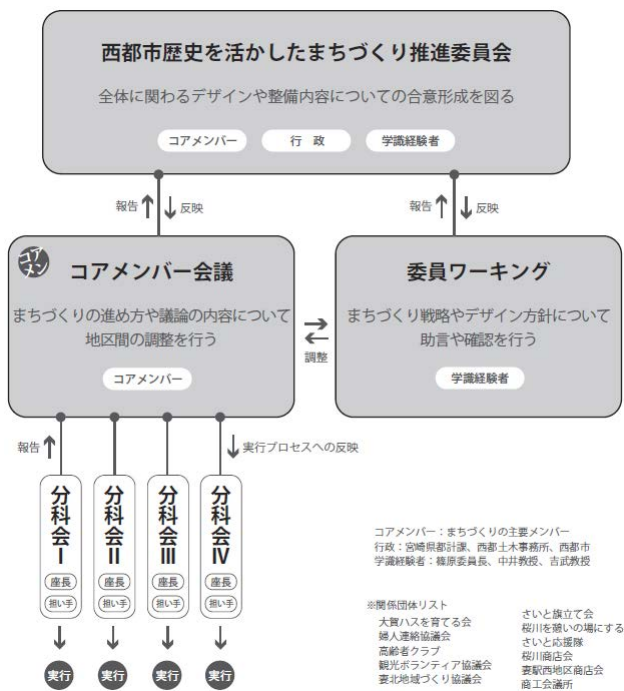


図-1 体制図

### 3. 道路デザイン

#### (1) 既存水系に沿った線形と水辺のデザイン

記紀の道の計画地周辺には、河岸段丘に由来する湧水が至る所に存在し、当地に伝わる記紀神話の舞台である「逢初川」もこの湧水の一つを源流としている。その源流の泉は、伝承地の一つとして大切に守られていた。各伝承地は逢初川を含む水系に沿って点在しており、物語をたどる道として、水系の存在は重要であった。既存の水系や地形・巨木といった土地の履歴に即して線形を決定することで、そこに昔からあるような道の風景をつくり出した。護岸保護工は最小限にとどめ、のり面植栽は自然に任せた。人工物や硬い線を極力なくすことで、雄大なランドスケープの中を行く園路のような雰囲気をもった道を形作っている。

なお、水系は市有地である稚児ヶ池公園内はもとより、民有地を縫うように流れている。そのため、水系沿いの散策路を実現するためには用地取得が必要であり、制度面の対応が不可欠であった。本稿では詳述は割愛するが、都市計画変更(道路線形)、土地区画整理事業の変更、西都市景観条例による「記紀の道ゾーン」の指定などが行われた。事業の初期の段階でこれらの議論や調整を綿密に行い、制度を適切に整えたからこそ現在の記紀の道の姿が実現できていることを書き留めておく。

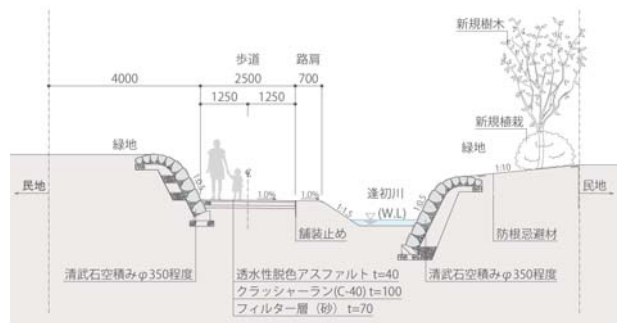


図-2 標準断面図 (s=1/200)



図-3 水系と伝承地の杜(写真奥)

## (2) 伝承地の整備

記紀の道の歩行者専用区間には、記紀神話の伝承地が5つ点在している。伝承地は記紀の道のストーリー上重要なポイントであり、整備前から小さな花壇があったり、普段から綺麗に掃除されているなど、地域の大切な場所として連綿と守られてきたことがうかがい知れた。

記紀の道を歩いてきた来訪者が伝承地にたどりついたとき、神話の物語に思いを馳せる。その時、目の前にどのような風景があったら、より印象的な体験となるか。古代から連綿と続いてきた土地の風景そのものが、まさにその答えであると考えた。古墳や池が遠くに見える場所など、印象的な風景に出会える場所に四阿を配置し、静かに佇める空間をつくった。

伝承地周辺に計画した工作物は四阿、ベンチ、最小限の舗装とサイン類のみであり、プランは全体的にゆとりをもたせている。限られた予算の中で最小限の整備をおこなったものであるが、地域住民が花壇等に活用できるような余地を残しておく意図もあった。

こうした余地から、次章で述べるような取り組みが始まり、徐々に広がっていくことになる。



図4 ゆとりある伝承地の整備

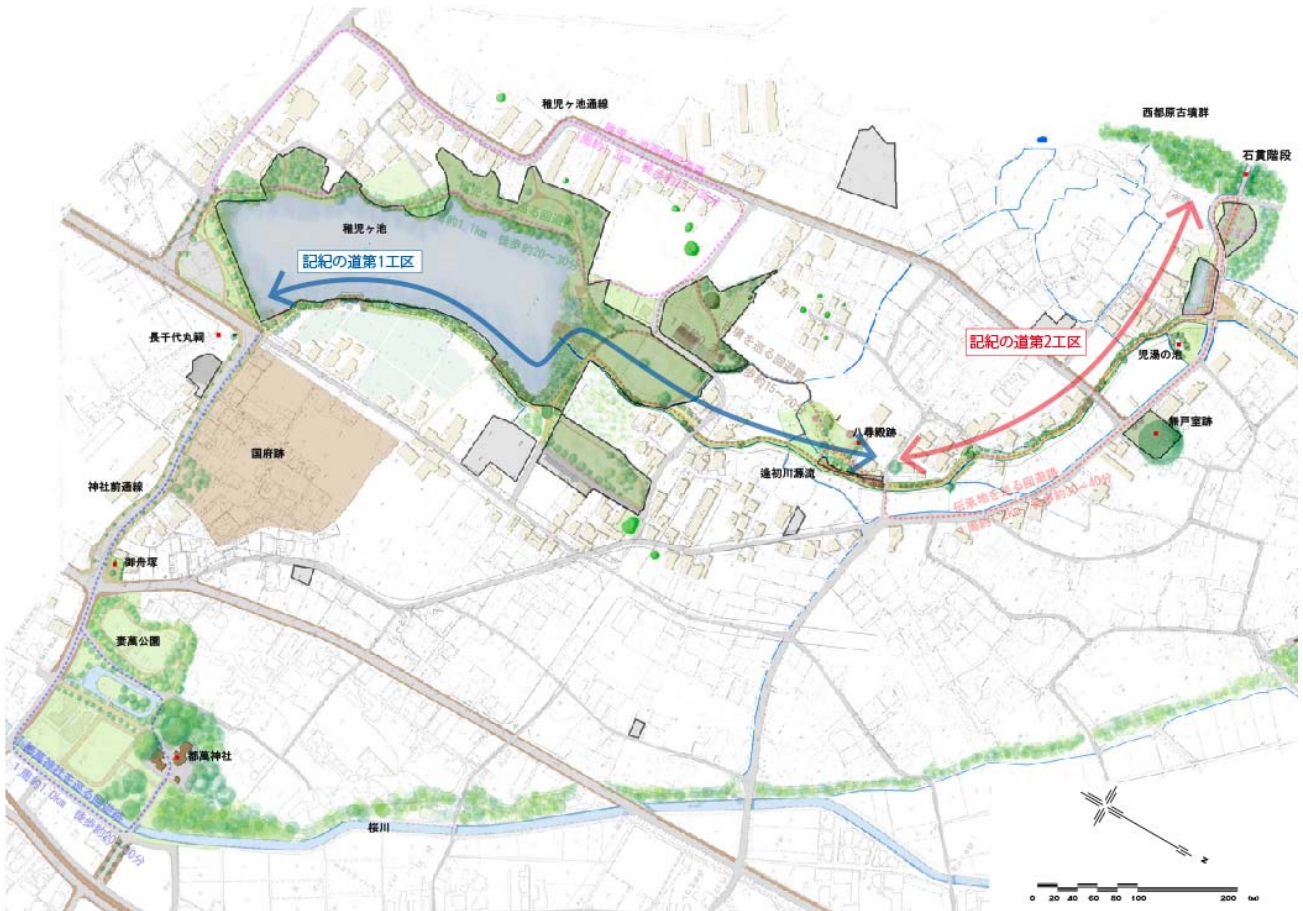


図5 全体平面図

## 4. 使いながらつくる ローカルでつくる

### (1) コアメンバー会議と地域づくり協議会の発足

予算や用地取得の影響によって整備に時間がかかる中、道としてのつながりを優先するため、舗装や小橋が完成して通行が可能になった区間から供用を開始した。ベンチや四阿、サイン、植栽等の付属物は後追いで設置していくことにした。これまで地域の中に個々に点在していた神話の伝承地や古墳が一つの道でつながることで、地域住民の間でストーリーが共有され、整備への期待が高まり、議論がより活発になった。そのような中、いくつか新たな課題が露見した。

その中でも根元的な課題であったのが、地域住民どうしが互いの情報を共有し、戦略を議論する場がないということであった。地域活動の拠点として各地区の公民館が機能しており、点在する伝承地も各地区がそれぞれの体制の中で管理していた。そこに物理的な道が横つなぎに通ることで、ひとつの神話の物語を伝える地域として、相互連携の必要性が顕在化した。

そこで、第2章で述べたような体制の改編を経て、後述ような取組みを進めていくことになる。

- ・沿道の植栽の取り組み
- ・地元作家との共作による散策マップの作成
- ・入口記名サインの製作

### (2) 沿道の植栽の取組み

#### a) 灌木および中高木

整備が進む中、コアメンバー会議にて、サクラ類やモミジ等の苗木を提供したいという住民の申し出が複数あるとの情報提供があった。こうした要望は可能な限り聞き受け、沿道に適地を探して植樹した。

このうち、サクラ類は神話伝承の中心人物コノハナサクヤヒメにゆかりのある樹木と言われており、伝承地近辺を中心に植えることとした。植樹はあらかじめ周辺の住民に声をかけ、集まった親子連れたちと植樹した。

また、地元のホテル保存の会にヒアリングをおこない、年々減少しつつあるホテルの生育に適した水辺環境とするために、幼虫のエサになるカワニナの生育を助けるネコヤナギを植栽した。明確な成果はまだ現れていないが、記紀の道がきっかけで具体的に動き出した取組みの一つとして、今後も注目したい。



図-6 サクラやネコヤナギの植栽の様子

#### b) 草花

草花は、木本類よりも頻繁かつ丁寧なメンテナンスが必要な場合が多く、植栽帯や花壇として区切って管理することが一般的である。記紀の道では、あえてエリアを区切らず、どのような場所にどんな花を植えるかというところから議論した。

現在まで、協議会やボランティア協議会などが主体となり、数年にわたって花植え活動をつづけているが、植栽する場所としては伝承地周辺が多い傾向にあると言える。要因として、前章で述べた通り、花壇等の活用を見越してある程度の余地を設計上意図して取ったことや、もともと住民の関心が高い場所だったことが挙げられる。記紀の道の大切なポイントとして伝承地を守り続けたいという住民の思いとマッチした結果である。



図-7 花植え活動と沿道の草花

#### c) 古代米と大賀ハス（古代ハス）の栽培

記紀の道では、道路に隣接する水田や池を利用して、古代にゆかりのある植物を栽培しようという試みが行われている。

古代米栽培は地域づくり協議会が主体となって2017年から取り組んでいる。6月の田植えや10月の稲刈りには、JA西都青年部や地元小学生等に参加を呼び掛け、住民どうしの交流が生まれている。収穫した古代米は、11月に開催される「西都古墳まつり」にて来場者に振舞われる。

大賀ハスは、1951年に千葉市で発掘された二千年以上前のハスの実から発芽したハスであり、全国に移植されている。西都でもかつて千葉市より移植された株の保有者がおり、記紀の道沿いの農業用ため池「稚児ヶ池」の一画で2015年より栽培を試みている。毎年6月の開花の時期になると、市内外から来訪者がある。

古代米や古代ハスの取組みが道沿いに展開することで、古代と現代の併存をテーマにした道らしい風景が生まれているといえる。



図-8 古代米の稲刈り(左)と開花した大賀ハス(右)

### (3) 散策マップの作成

記紀の道のPRを議論する分科会にて、記紀の道の散策マップを作成するという提案がなされた。散策マップは既に西都市観光協会が発行していたものがあつたが、リニューアルする時期が近づいていたため、観光協会も分科会メンバーに加わって散策マップの作成に取り掛かった。

こうしたガイドマップは対象の魅力や伝達する媒体としては有用なものであるが、作り方を間違えるとかえって安っぽくなってしまふという諸刃の剣である。作成にあたっては、記紀の道の魅力を改めて問い直し、伝えるべき情報の編集と、印象的な世界観の表現に注力した。

#### a) 地元作家の方々と共作

我々が求める世界観を具体的なかつ高質なビジュアルとして実現するため、地元作家に協力を依頼した。

- ・マップ：水彩画の画家
- ・版画調アイコン：イラストレーター
- ・表紙：アーティスト

とくに版画調アイコンは、物語のシーンをイメージしやすくするとともに、抽象的なシルエットが物語への想像力を掻き立てることを期した。今後、案内サイン類への展開を考えている。

#### b) 解説文の工夫と新たな視点

解説文は、伝承地を個々に解説していくのではなく、一つの物語として読む中で、その中に伝承地が現れてくるような書きぶりとした。これは、記紀の道を歩きながら伝承地をめぐる体験とのリンクをねらったものである。

また、野鳥や野草に関する情報も記載した。記紀の道ではバードウォッチングを楽しむ人もおり、もう一つの楽しみ方となっている。これは記紀の道に今まで無かった視点であり、こうした情報をストーリーに組み込むことで、何気ない日常の風景が少しずつ特別なもの（＝地域の宝）として認識されていく。



図-9 散策マップ (B4外六ツ折) と版画調アイコン

### (4) サイン

(1)で述べた通り、道の全通を優先したため、サインについては設計図はあるものの設置は先送りされていた。ある程度めどが立った段階で、入口記名サイン5基を設置することにした。具体化にあたり、色について委員ワーキングにて指摘され、また、題字の書体について分科会で検討することとなった。

#### a) 色：草木染めからヒントを得る

本体の塗装色は当初グレー(N40)であった。グレーはニュートラルな色であり、照明柱など他の工作物にも使用していた。しかし、入口記名サインは記紀の道の顔であるから、古代の色を参考にするなどの工夫をしてはどうかという意見が委員ワーキングで出された。記紀神話に合わせて「日本最古の恋めぐり」と題した散策マップが完成した折でもあり、関係者のあいだで世界観のイメージが共有されつつある時期でもあつた。

そこで、サインの色についても古代からヒントを得ようと考えた。色は、古来から藍染や茜染といった「草木染め」によって得ていた。分科会において、木城町(西都市の隣町)に天然材料を用いて草木染めをおこなっている施設があるとの情報があつた。当施設(茶臼原自然芸術館)の協力の下、いくつもの色の中から、下記の色を選定した。

- ・本体：ゴバイシ (古代紫)
- ・題字：ヤマザクラ

ゴバイシはヌルデの虫こぶのことで、古来から有用な植物として利用されてきた。染物は品のいい紫色となる。また、ヤマザクラは記紀神話にゆかりのある植物であり、淡いピンク色を呈する。この2色の組み合わせで構成することとした。

この時の出逢いが、後述する草木染めワークショップへとつながっていく。

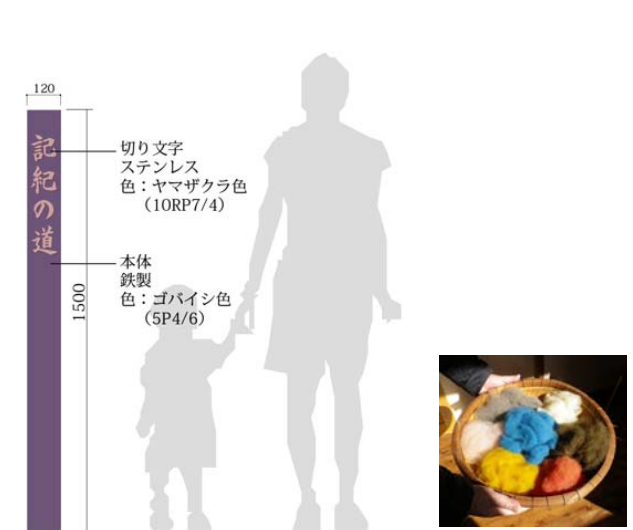


図-10 サインデザインと草木染め

## b) 題字：地元小学生の書を採用

題字は当初の計画では一般的な明朝体であった。しかし、これも地域との関わりを生むポイントになると考えた。分科会で議論する中で、妻北小学校の児童から選抜で書いてもらうのはいかがでしょうかという意見が出された。最終的に、夏休みの宿題として「記紀の道」の4文字を、4～6年生の全員に提出してもらい、その書道作品の中から分科会メンバーで5作品を選抜した。

五者五様の題字を取り付けた入口記名サインは、2019年3月に設置し、直後に開催した「歴史を生かしたまちづくりフォローアップ会議」（委員会の後継組織）にて除幕式を行った。セレモニーには児童本人とその家族も招待し、記紀の道を歩きながら1本ずつ除幕していった。共創によって地域への愛着を育んでいる。



図-11 除幕式と新聞記事（宮崎日日新聞平成31年4月3日）

## c) 大賀ハスの草木染めワークショップ

草木染めの色の検討をする中で、記紀の道で栽培している大賀ハスで染めたらどのような色になるのかという話題が出た。非常に面白い着眼点である。茶臼原自然芸術館の全面的な協力の下、記紀の道にて大賀ハスを用いた草木染めワークショップを開催した。鮮やかな黄色に染まった布が、伸びやかな風景に映える。

ここで大切なのは、住民が来訪者との交流を通じて風景の価値を再認識する機会となったという点である。こうした取組みを通して少しずつ交流が増えていくことで、地域に対する誇りに繋がっている。



図-10 風に揺れる大賀ハス染めのハンカチ

## 5. まとめ

記紀の道は道路法上の道路でありながら、既存の水系や田んぼ、巨木といった土地の風景をデザインの拠り所とし、地域住民自らの手によって丁寧に手入れされた場所が道沿いに展開している。その背景には、

- ・ 伝承地を大切にしたい地域の思いが根底にあったことがまず挙げられるが、それに加えて
  - ・ 余地を生む道路デザイン
  - ・ 制度設計
  - ・ 体制づくり
  - ・ 「どんな道にしたいか」という思いを関係者で共有し、それぞれの役割の中で、植栽活動、散策マップ、サイン製作といった活動を一つ一つ丁寧に続けた
- ということが挙げられるであろう。その結果、はじめは小さかったかもしれない「伝承地を大切にしたい地域の思い」が増幅し、伝搬し、やがて次の世代へとつながっていくことになる。記紀の道の整備や一連の取組みを通じて、自分たちが暮らす地域への愛着やコミュニティが醸成され、その表出として、地域の人たちの思いがこもった風景が生まれつつある。